



Newsletter No. 14

歴史都市を守る 「文化遺産防災学」推進拠点

立命館大学 グローバル COE プログラム

目 次

- 京都における近世・近代寺社建築の悉皆踏査 1
中村琢巳, 金玟淑, 益田兼房
- ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修 2009 3
- JICA国際専門家研修
「歴史都市の保全・防災と文化観光への活用」 5
- 「文化遺産防災学・教育プログラム」演習 2009 実施報告 ... 6
- 第 2 回世界遺産防災ワークショップ参加報告 6

2010年 2 月号

■ 研究トピック ■

京都における近世・近代寺社建築の悉皆踏査

中村琢巳（日本学術振興会特別研究員）、金玟淑（立命館大学ポストドクトラルフェロー）、
益田兼房（立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 教授）

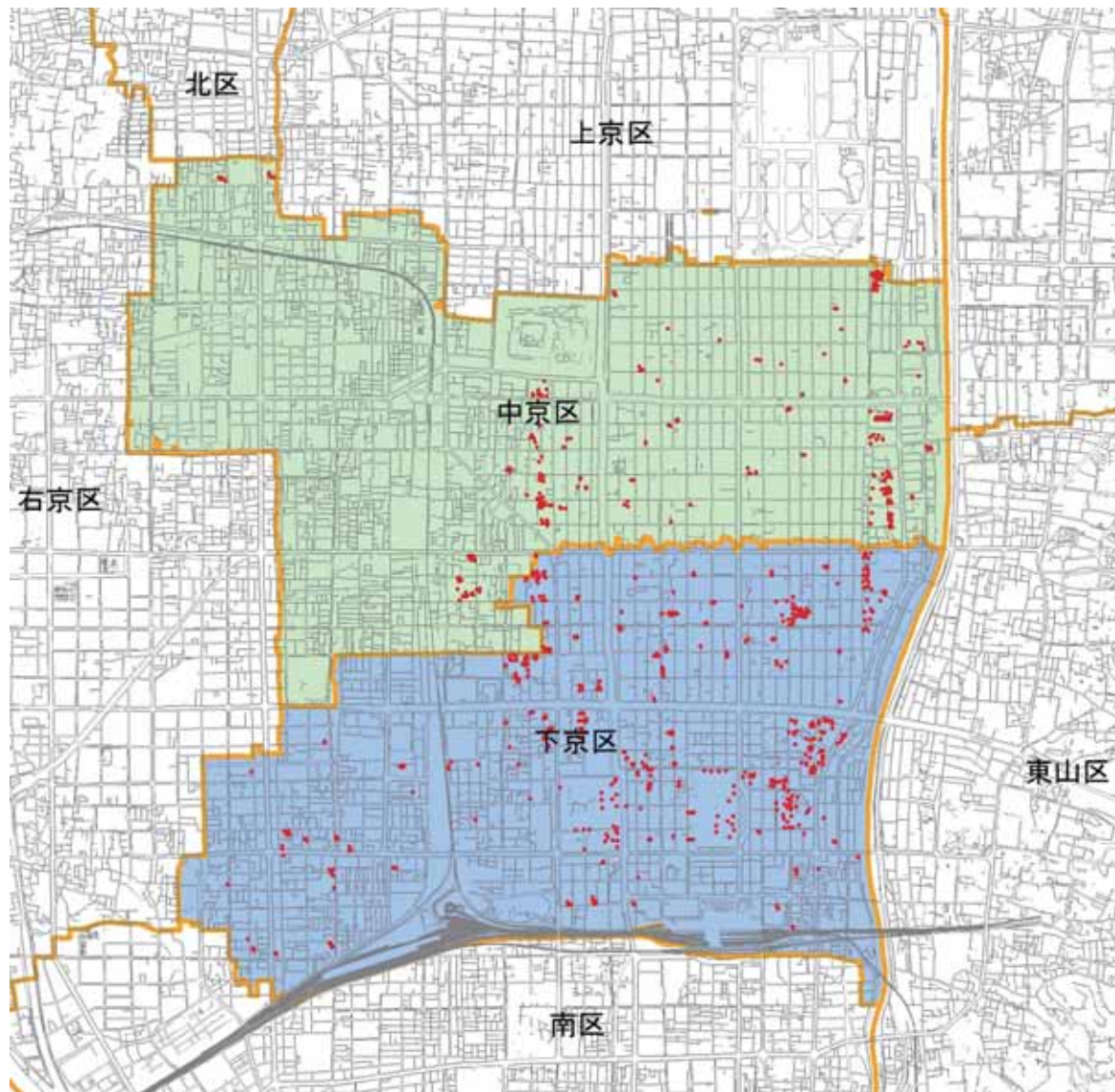
京都の歴史を物語る多彩な文化遺産のなかでも、寺社建築はとりわけ重要な構成要素です。なぜなら、寺社建築は中世、近世、近代の極めて長い歴史を伝える造形物であり、かつその造営には当時最高の建築技術や材料、美術工芸等が投入されているからです。

では、どのような建物が「守るべき文化遺産」なのか？あるいは京都にどれほどの守るべき寺社建築が現存するのか？文化遺産の価値と脆弱性に関するこのような問いに答えるためには、データベース（目録）が必要です。さらに、文化遺産の防災対策を考える上でも、京都全体の歴史的価値を見据えた計画立案を目指すには、データベースの存在が出発点となります。

掲載した分布図はこのような観点から、京都に所在する寺社建築の網羅的なフィールドワークを実施し、GIS データベースとしてまとめたものです。すなわち、下京区・中京区に所在する全ての寺院・神社に現地におもむき、境内を観察することで歴史的建造物（昭和戦前まで）を抽出し、その記録化（調査票作成と写真撮影）を行いました。本年度までの調査結果によると、269 寺社に 798 棟の歴史的建造物の現存を確認しました。下京区を例にとれば、全ての寺社（219 寺社）の 85%にあたる境内に、歴史的建造物が所在することになります。文化財建造物としてその価値が顕在化したものに限らず、京都は文化遺産の宝庫であることがこの数値からもうかがえます。

さらに、このような調査研究は単なる「目録づくり」にとどまるものではありません。寺社建築の所在情報を網羅的に整備することで、歴史都市・京都の新たな価値を発見し、それを高揚・顕在化させるまちづくりや防災の工夫を導くことも射程となります。図をみると、文化遺産の分布特性にいくつか気がつきます。そのひとつは、東西の本願寺を起点として、そこから西側と東側で寺社建築が带状に連なり、京都中心部を取り囲むようにネットワーク化されている点です。このような文化遺産集積エリアに所在する寺社建築は、たとえ建物単体として顕著な文化的価値を備えなくとも、京都全体の歴史的な都市構造を伝える重要な構成要素といえます。

もちろん、歴史都市・京都やそれを構成する歴史的建造物の価値は単一的な視点に限るべきではないでしょう。むしろ、できるかぎり多様な視点から文化的価値を考えていくことが、その固有性の保存・継承では大切です。とはいえ、文化遺産のフィールドワーク、データベース化、価値評価を学術研究の対象として行うならば、その汎用的プロセスの手法提案が求められます。本研究は京都に現存する個別具体的な建物を対象としながらも、様々に応用可能な調査・評価手法を導くことも視野におさめています。



京都（中京区・下京区）に現存する近世・近代寺社建築の分布
 (2008年度から2009年度のフィールドワークによる調査結果に基づき作成)



建築彫刻



歴史的景観を伝える境内



組物に描かれた彩色

ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修 2009 を中心とした国際連携委員会の活動

2009年8月30日（日）から9月12日（土）までの2週間、第4回ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修2009を、京都とネパールの世界遺産カトマンズの谷の歴史都市パタンにて1週間ずつ開催しました。この国際研修は、2005年1月に神戸で開かれた国連防災世界会議“ユネスコ・イクロム・文化庁 文化遺産危機管理”分科会勧告のフォローアップとして、立命館大学が継続的に行っているものです。

初日となる2009年8月30日（日）、京都国際専門家会議『地震帯における世界文化遺産の持続可能な保護』を開催しました。この会議は、世界文化遺産保護に携わっているユネスコ・イクロム・イコモスの専門家を招聘し、世界文化遺産を守るための危機管理計画の必要性などについて検討しました。

前半の京都では、清水寺や産寧坂重要伝統的建造物群保存地区等周辺地域・仁和寺の防災設備等の見学、文化遺産の定義と災害危機管理の重要性・日本の伝統的木造建築における耐震性評価・阪神淡路大震災の経験等の講義、災害危機シナリオの把握・災害評価と復旧の優先順位等の演習を行い、木造文化圏である日本の経験と先進的な取り組みを示しました。後半のカトマンズでは、立命館大学グローバルCOEの提携機関であるトリブバン大学とともに、1934年大地震で被災した王宮を再利用したパタンミュージアムでの緊急時シミュレーション演習等、フィールドに密着した演習を多く取り入れ、途上国の実態に即したより実践的な計画案の立案手法を学ぶ研修を行いました。これを踏まえ、各国ごとに文化遺産危機管理計画案を立案しました。



京都国際専門家会議
『地震帯における世界文化遺産の持続可能な保護』の参加者



ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修 2009(前半:京都)

最終日の2009年9月12日(土)は、カトマンズのヒマラヤホテルにて、日本大使館等の後援で、カトマンズ・フォーラム『持続可能な文化遺産危機管理のための保存と開発』を開催し、『地震帯における世界文化遺産の持続可能な保護に関する京都・カトマンズ勧告』を採択しました。

この国際研修は、日本国文化庁、京都府、京都市、兵庫県、韓国文化財庁、カトマンズトリブバン大学、パタン市、パタン博物館等の多くの専門家に講師をつとめていただいております。また、招聘研修者選抜におけるイクロムとの協同、イコモス国内委員会の後援等、国際機関との連携を図り、ユネスコから高い評価を得ています。立命館大学からは、ユネスコチェアプロフェッサー益田兼房(R-GIRO教授)をはじめ、ロヒト・ジグヤス(R-GIRO教授)、大窪健之(理工学部教授)、伊津野和行(理工学部教授)、酒匂一成(R-GIRO准教授)、コーディネーターとして、板谷直子(R-GIRO准教授)、李明善(R-GIRO准教授)、金玖淑(R-GIRO PD)、また、理工リサーチオフィス、人文社会リサーチオフィス、博士後期課程学生諸氏、サポートスタッフ等、多くの方々のご尽力によって毎年の開催が実現できています。

グローバルCOEの国際連携委員会の活動は、このユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修を主要な活動とするとともに、これに関連する国際専門家会議開催のほか、ユネスコ・イクロム等国連国際機関の文化遺産防災に関わる会議への論文発表や参加を行い、地球規模での文化遺産研究と施策の推進に貢献することを目指しています。



ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修 2009(後半:カトマンズ)



カトマンズ・フォーラム
『持続可能な文化遺産危機管理のための保存と開発』

JICA国際専門家研修「歴史都市の保全・防災と文化観光への活用」

独立行政法人国際協力機構（JICA）大阪センターで実施される国際専門家研修で、「歴史都市の保全・防災と文化観光への活用 Conservation and Risk Management of Historic Towns for Cultural Tourism」が山崎正史（理工学部教授）のコーディネートで実施されました。

立命館大学歴史都市防災研究センターがユネスコ・チェア国際研修プログラムに認定され、国際研修の実施・推進が期待されていたため、G-COE 採択決定の前年度に JICA 大阪へ提案し実現したものです。その前に「文化遺産防災」のテーマで企画提案を行ったのですが、参加意向表明した国が少なかったため、観光への活用をテーマに加えて企画しなおし、実現したものです。

2009 年度の実施期間は 8 月 24 日から 9 月 4 日まで、うち研修実施日は 12 日間でした。参加者は（派遣研修員の所属機関と専門分野を括弧内に示す）カンボジア（2 名 いずれも観光省・観光計画）、ベトナム（文化財景観保全センター・文化遺産保存）、エジプト（考古局・文化財保存）、トルコ（2 名、文化観光省・文化観光マネジメント、大学建築保存学科教員）、イエメン（観光マネジメント）、マケドニア（文化省・文化遺産保護）、エチオピア（職業都市開発局・都市計画）の 7 カ国 9 名でした。

文化遺産防災に関しては、大窪健之（理工学部教授）が歴史都市防災分野の講義を担当した他、研修旅行として高山市伝統的建造物群保存地区および白川郷荻町伝統的建造物群保存地区にて防災設備を見学しました。参加者の多くが文化遺産防災に高い興味を示していました。



防災設備の説明を受ける研修員（高山にて）



研修メンバー（白川郷荻町にて）

「文化遺産防災学・教育プログラム」演習 2009 実施報告



DIG（図上防災訓練）演習の様子

当拠点では文化遺産防災学・教育プログラムを設置し、2009年度より運用を開始しています。この教育プログラムでは定められた講義単位を取得し、30時間の演習を受講するなど必要な条件を満たせば、学外者でもプログラム認定を受けることができる履修証明制度になっています。今回は演習の一環として、大窪健之（理工学部教授）の指導で歴史地区の調査を実施しました。8月1日～2日にかけて1泊2日の行程で兵庫県篠山市を訪れ、篠山伝統的建造物群保存地区に指定されている城下町を視察し、街道集落の残る福住地区と、田園風景の残る大芋地区の2箇所を対象に、歴史地区の防災計画策定に必要な現地調査手法の習得および、住民参加ワークショップの運営技術を学びました。災害危険性に関する現地調査を行い、参加者で協働しながらDIG（図上防災訓練）と呼ばれる住民ワークショップ手法を援用して危険性を整理するとともに、具体的な災害対策について考察しました。

第2回世界遺産防災ワークショップ参加報告



世界遺産防災ワークショップ会場

ユネスコ世界遺産センター主催のこのワークショップは、2009年11月14日から18日まで、イスラエルの世界遺産都市アコー等で開催されました。立命館大学G-COE文化遺産危機管理ユネスコチェア国際研修のこの問題への貢献の故に参加要請があったもので、立命館大学からは、益田兼房教授とロヒト・ジグヤス教授が参加しました。この会議は、2008年11月ギリシャ・オリンピアでの第1回会議を受けた第2回目です。アジア・中南米等の途上国を含む世界中から約30名の専門家が参加し、益田教授は、地震帯にある世界文化遺産の危機管理計画の重要性を報告しました。今後の新規世界遺産申請での災害危機管理計画義務づけの議論がされたのは興味深いことでした。会議結果は世界遺産センターがまとめ、2010年世界遺産委員会に報告の予定です。

立命館大学 G-COE 文化遺産防災学推進拠点
Newsletter No.14
(2010年2月号)

発行

立命館大学 G-COE 文化遺産防災学推進拠点

びわこ草津キャンパス事務局（本部）：
立命館大学 防災 SRC 事務室
〒525-8577
滋賀県草津市野路東 1-1-1
TEL: 077-561-5083
FAX: 077-561-3418
Email: heritage@st.ritsumeai.ac.jp

衣笠事務局：
立命館大学歴史都市防災研究センター
〒603-8341
京都市北区小松原北町 58
TEL: 075-467-8801
FAX: 075-467-8825
Email: rekibou@st.ritsumeai.ac.jp

